る。埋土は下層が自然の堆積層、上層が人為的な整地層で、下層からは二次的に流入した埴輪片のほか、十二世紀中頃の瓦器椀や戦国時代の鉄砲玉が出土している。

3　継体陵論

古墳の名称のもとになった「今城」については、さきに紹介した『摂津志』の「今城陵」の記述が初見で、その後、寛政十年（一七九八）の『摂津名所図絵』の「今城冢」、さらに文化年間（一八〇四～一八一七）の『山崎通分間延絵図』の「今城山」へと変転し、現在のよび名にいたっている。これら地誌などにみられる名称の変遷は、今城塚が近世を通じてどのように意識され、扱われてきたかが推測されるわけだが、何よりも注目しなければならないのは、「今城陵」とよばれていた事実であろう。

『日本書紀』は継体天皇が治世二五年目、西暦でいえば五三一年に亡くなり、藍野陵に葬られたと記す。また平安時代に編纂された『延喜式』は継体の陵を「三島藍野陵」とよび、「在嶋上郡」と記録する。嶋上郡は三島東半の地をさす大宝令以来の郡名であり、『延喜式』が三島藍野陵と呼称することは公的記録としては本来的にはそぐわない。『延喜式』の編者が古来の郡名で、『書紀』に散見される「三島」の名辞にこだわったためだろうか。

大半の大王陵（古墳時代の天皇陵）は律令制の崩壊と戦国期の混乱のなかで、しだいに所在地がわからなくなっていったのは周知のことだが、江戸時代に国学者などの研究者による探索がはじまり、今日まで追究されてきた。継体陵は淀川流域に所在する唯一の大王陵である点、ターゲットとなる大形古墳はかぎられることから、少なくとも比定について百家争鳴といった状況は生じなかったようだが、表5に示した史料をはじめ、その後の調査・研究にみられるように、若干の紆余曲折といささかの論争はあった。およそ十三世紀前半頃までは陵での祭事も執行され、適宜に管理されていたとみられるのに対し、十三世紀も後半になると盗掘記事に象徴されるよう

表5　継体陵関連年表

西暦・元号	陵名の変遷と関連古墳・遺跡の動向	
四五〇頃		太田茶臼山古墳築造・新池A期埴輪供給
五三〇頃		今城塚古墳築造・新池C期埴輪供給
五六二(欽明二十三)	「摂津国三嶋郡埴廬」『日本書紀』	
七一二(和銅五)	(継)「御陵者三嶋藍野陵也」『古事記』	
七二〇(養老四)	(継)「藍野陵」『日本書紀』	
九二七(延長五)	(継)「三嶋藍野陵(略)在摂津国嶋上郡町兆域東西三町南北三町守戸五烟」『延喜式』	
一一〇〇(康和二)	(継)「摂津要劇田廿町五反二百八十歩」『朝野群載』	
一二世紀	(継)「摂津國島上郡三島藍野陵」『扶桑略記』	
一二〇〇(正治二)	(継)「摂津島上郡傍書継体天皇(略)」『諸陵雑事注文』	
一二八八(正応元)	(継)「召取山稜犯人繼體天皇摂津島上陵」『公衡公記』	
[永禄年間]		(今)城砦として内堤等一部改変
一五九六(文禄五)		(今)地震による墳丘・内堤張出部崩壊
一六九六(元禄九)	(太)「三島藍野陵今在島上郡島下郡界大田村俗云池上陵亦茶臼山」松下見林『前王廟陵記』	
一六九七(元禄十)	(継)「(略)継体天皇之御廟と申伝候所無御座候事」『興楽寺文書案』	
一七三五頃(享保末)	(今)「今城陵在郡家村永禄中為城砦」『摂津志』	
一七九八(寛政十)	(今)「今城冢」『摂津名所図絵』 (太)「嶋上は嶋下の写し誤れるか」本居宣長『古事記伝』	
一八〇八(文化五)	(太)「大田村古冢此也(藍野陵乃在其交而隷是下島郡)」蒲生君平『山陵志』	
一九世紀初頭	(今)「細川六郎古城跡字今城山」『五街道分間延絵図』 (太)「継体帝陵」『五街道分間延絵図』	
一八六三(文久三)	(太)「三島藍野陵」に治定	

(継)は継体陵に関する史料、(今)は今城塚古墳、(太)は太田茶臼山古墳を対象とした調査・記録(森田二〇〇三より)

に、管理の不充分さが露呈してくる。その後も戦国期を通して城砦利用などでさらに荒陵化、やがて藍野陵は公的な記録から完全に姿を消し、ついに所在地すらわからなくなってしまったのだろう。

江戸時代になり陵墓探索の気運が高まるなかで、松下見林の『前王廟陵記』を皮切りに、本居宣長・蒲生君平らが追究。いずれも太田茶臼山が藍野陵との結論に達するが、彼らが等しく苦慮したのは、『延喜式』の「在島上郡」の所在記事であった。それは太田茶臼山が島下郡に在るにもかかわらず、陵名の藍野に固執し、当時としては精一杯「藍」の地名考証をおこない、島下郡安威郷の近接地に陵を求めた結果であった。皮肉っぽくいえば、国学がテーゼとしていた実証主義の学術成果であって、けっして今城塚が荒れ果てていたからではなく、ましてや伏見地震で大被害を受けたためでもなかった。そこで宣長らが苦し紛れに考えたのが郡界移動説で、この思考は明治十一年の『山陵記』までの論拠となった。その一方で江戸時代の地誌や地域史料の類は、今城塚を今城陵・今城冢・今城山とよび名を替え、学術論議を介さない古墳名の変遷はかえって伝承の正しさ、すなわち城砦に利用されていた今城塚が継体陵であったことを強く示唆する。これは同時に今城塚が所在する富田台地を中心とする一帯が古代に藍野とよばれていた事実を示すものでもある。継体陵の治定は『前王廟陵記』の考案を受け、実質的には享保十七年までには太田茶臼山に定まり、江戸時代を通して幕末までに周垣、拝所、高札、鳥居などが設置されることになった。

治定陵・太田茶臼山に対して、今城塚こそ真実の継体陵ではないかと、はじめて疑問をなげかけたのは木村一朗で、古代史の喜田貞吉や考古学の

梅原末治はすぐさま呼応、とくに喜田は論議の推進役として大きな働きをする。その流れを受けた天坊幸彦は総持寺の「寺領散在田畠等」の坪付史料を詳細に考証し、島上と島下の郡界を確定、今城塚を真実の継体陵と結論づけた（図3参照）。最近になって公表された陵墓関係資料を分析した高木博志・外池昇らは、天坊の研究成果を受けた当時の書陵寮考証課の和田嘩一が「今城塚を以て継体天皇の陵と定めることハ最も当を穫たものと信ず」としていたことを紹介している。天坊の偉大な研究は当時の陵墓担当官にも大きな影響を与えたが、ついに治定陵が変更されることはなかった。

戦後、考古学の発達はいちじるしく、とりわけ古墳時代の研究にはめざましいものがあった。その恩恵は継体陵論にも大きな影響を与えた。古墳築造企画論や新池遺跡の調査は、太田茶臼山の築造時期を五世紀中頃に限定し、継体の没年である五三一年（『日本書紀』に拠る）と大きく齟齬することを明らかにし、一方で今城塚の六世紀前半の築造がほぼ確定し、継体陵である可能性がますます強まってきている。これからは今城塚の壮大さだけでなく、墳丘形態、埋葬施設、埴輪祭祀などの内容が継体の出自、内政、外交、あるいは後継政権について、いかに整合性をもつのかが問われるのであろう。もちろん一朝一夕になし得るところではないが、古市や百舌鳥古墳群にみられる大王陵と比較して、受け継ぐべき伝統的な部分と今城塚において顕在化する新規な部分を抽出し、検討することは可能だ。

伝統的な部分は①三段築成、②二重周濠、③くびれ部両側の造出など、いずれも古墳の形状にかかわる要素で、古墳時代中期の大王陵の設計企画を踏襲したものとみられる。築造にあたり外濠を

極端に浅く掘削しているのは、機能面では型式化といえるが、実質的には兆域を充分に確保しながら、土木量の低減を図ったのだろう。二重濠をもつ古墳としては、あらたな試みといえる。墳丘は三段の可能性が高く、大王陵の格式と伝統をきっちり守っていることが考えられる。

新規な部分としては、直前の大型古墳である岡ミサンザイの実態がわからないので不確定さはのこるが、ひとまずは④墳丘内石積と排水溝の設え、⑤横穴式石室の導入、⑥家形石棺の採用、⑦造出での形象埴輪祭祀の否定、⑧内堤張出の付設、⑨張出での埴輪祭祀などをあげておきたい。このうち墳丘内石積とそれに取り付く複数の暗渠排水溝の設えは、墳丘構築に際して最新・最高の土木技術を駆使していたことがうかがえる。この種の暗渠排水溝については、横穴式石室の導入にともなうものかもしれないが、畿内の横穴式石室をもつ古墳としては比較的早い段階の市尾墓山や宇治二子塚などでは、石室の基礎地業をほどこすものの、排水溝がみられないことから、その後の物集女車塚などの横穴式石室に付設された排水溝は、羨道の長大化・墓室化にともなって採用された可能性が高い。仮にそうならば畿内的な横穴式石室の排水溝は、今城塚でみつかった墳丘内の排水施設などをヒントに派生した可能性も考えられる。また三種の凝灰岩製の家形石棺はどの石材が初棺に採られたのかは判然としないが、想定される石棺の形状については、市尾墓山例が参考になり、小口に一対の突起をもつ形式ならば鳴稲荷山や甲山など近江の諸例が近似するだろう。埴輪祭祀では、内堤に付設された張出を造出に変わる主要な埴輪祭祀場として、はじめて採用した点が注目される。外堤に向かって六五〇平方メートルにも及ぶ壮大な埴輪舞台に多彩な形象埴輪を配列した様は

圧巻である。

総じて今城塚は、古墳の外貌については中期の大型前方後円墳を踏襲し、埋葬関連施設や古墳で実修された祭祀儀礼など時機に即応すべき部分については、余すことなく新機軸を打ち出していると考えられる。その最たるものは、古市や百舌鳥の大王陵で普遍的にみられた陪塚がまったくともなわない事実であろう。この一点こそは、大王権の隔絶化を示すものとして重要な意味をもち、大王陵の変遷のなかでも今城塚の造営が大きな転換点になると評価し得る。

真実の継体陵が今城塚ではないかとする考えが強まるなかで、太田茶臼山の被葬者が取り沙汰されている。すでに幾人かの候補もあがり、論議も深まっているが、前述したように三島古墳群全体の変遷観からは、五世紀中頃の築造とはいえ桁外れに大きい太田茶臼山を単なる三島の首長墓とみることはできないように思う。とりわけ今城塚を継体陵と認める立場からは、それと同等以上の規模の太田茶臼山についても三島の枠を越えた造墓背景をもつと考えられ、陪塚をもつスタイルも、その考えの妥当なことを支持する。多くの考古学者は地域のなかで中核となる前方後円墳について在地の首長墓とみる傾向があるが、こと三島の二大古墳の被葬者像については琵琶湖・淀川水系というより広範な地域を共通の基盤とし、かつまた同じ埴輪工場の使用という事実から、私はそこに血縁的なかかわりをも予想する。そして造墓時期に約八〇年の差を認めるなかであえて太田茶臼山の被葬者を求めるならば、『上宮記一云』の系譜にあるヲホド（継体）の曾祖父にあたるオホホド王がもっともふさわしいと考える。オホホド王は琵琶湖北東部の雄族である息長氏の始祖的人物とされ、彼の姉妹であるオシサカオオナカツヒメや

ソトホシノイラツメが允恭大王の后妃となったことで、ヤマト王権の外戚となり、大いに権勢を振るう立場にあった。太田茶臼山が允恭陵（市野山）と同じ設計で築造されていたことはよく知られており、系譜に示された関係が実際の古墳の親縁性に映された貴重な事例とみたい。

4　内堤張出での埴輪祭祀

埴輪の種類と配置　内堤の張出で検出した形象埴輪は、家一八、柵二四・門二、器財三一（器台五・蓋一・盾付大刀一五・盾一・靫一、甲冑二、不明六）、男子像二〇（武人四・鷹使い二・力士四・座位四・冠帽一・不明五）、女子像八（巫女八）、動物三三（馬八、牛二、鶏五、水鳥一三、［獣脚］二、不明三）など一三六点以上にのぼり、最終的には一七〇～一八〇点にもなろう。また個々の造形もきわめて高い品質を保持していて、何よりも資料自体の規模が大きい。たとえば家形では、一八点のうち一二点が入母屋型式で、しかもその大半には堅魚木を置き並べ、千木を設える建物も五点を数えるなど、豪壮な建物や神殿風の建物が目立って多いことが指摘できる。そのうちの一点は、全高一七〇センチを測る列島最大のもので、全体を上屋根、下屋根＋壁体部、基台部の三分割で成形した屈指の家形である（口絵）。この量と質に裏づけされた今城塚の形象埴輪群は、抜群の内容をもつことは疑いなく、わが国最大の形象埴輪群といえるだろう。この埴輪群をさらに特徴づけるものとして、祭祀場全体を南北方向に設置された四つの柵列（東側から柵列一～四）によって四つの方格区（一～四区）に整然と仕切っていたことがあげられる。なお各区画の南辺には柵列がなく、北辺についても

柵列を設けた様子はない。

張出本来の幅は、柵列三に組み込まれた門を中心に反転復元すると約一〇メートルとなり、埴輪祭祀場全体の面積は張出の東西長約六五メートルから約六五〇平方メートルになる。各区の東西幅は一区一〇・五メートル、二区七・五メートル、三区一〇・六メートルで、四区については三〇メートル以上となる。個々の埴輪の設置は、掘方がまったく検出されず、直接据え置くか、まわりに土を寄せ集めて樹立させたと考えられる。こうした樹立の仕方は、形象埴輪の配置が祭祀の内容に規定され、個々の埴輪の向きを微妙に調整する必要があったためと思われる。

一区――身舎を吹き抜けにした入母屋造り、寄棟造り、片流れ造りの家が一棟ずつ配置され、入母屋造りの家には一羽の鶏が沿い、東西方向に五基の器台が並んでいた。東側の柵列一と西側の二区との間の柵列二には、ともに門が配置されていない。このうち入母屋造りの一棟には、妻側の軒まわりに四尾の魚と一羽の水鳥がヘラで描かれている。

二区――一棟ずつの入母屋造り、寄棟造りの家に、一羽の鶏と一体の巫女、若干の不明器財、そして南側には大刀列を北（外濠）側に向けて配置していた。西の三区との境にある柵列三の中央部には扉のない門が設えてあった（口絵）。

三区――数棟の入母屋造りと一棟の切妻造りの家をはじめ、複数の甲冑、二区から連続する大刀列、二山冠の男子、楽坐の男子、立像の巫女群、二体八本分の［獣脚］、複数の鶏、そして四区に連なる水鳥列などがみられ、質量ともに他区を圧倒している。さきに少し触れた三分割成形の家形の屋根は破風板を相欠きで交差させた千木をみごとに表現、身舎は吹き抜け様の壁立ち、基台部は円筒の総柱である。妻側の中心には下屋根から上

評価したのである。読書の方には、はなはだ不充分なものに映るのは承知しているが、太田茶臼山の存在なくして、今城塚の造営は有り得なかったというのが、本書のいまひとつの主張でもある。

なお本書では、一部の項目（Ⅰ章の一、第Ⅱ章の三・四、第Ⅴ章の二～五）について、拙稿をもとにその後の知見を加えて要述している。それぞれの詳細は「嶋上郡の方格地割に関する覚え書」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要一二』、「青龍三年鏡とその伴侶」『古代』一〇五、「銅鏡百枚考」『東アジアの古代文化』九九、「継体大王の港津」『あまのともしび』、「今城塚古墳と埴輪祭祀―継体陵論の道程―」『東アジアの古代文化』一一七を参照されたい。また、調査報告書やその他の文献などについては、紙数の都合でその多くを割愛した。各位のご寛恕を願う次第である。

ところで二〇〇六年は、全国初の埋蔵文化財調査センターが高槻に設立されて丸三〇年が経過した節目の年にあたる。その間にどれほどの遺跡の調査がおこなわれたか、感慨はひとしおである。本書がなったのは、これまでの原口正三先生の叱咤激励もさることながら、冨成哲也・大船孝弘、橋本久和・鐘ヶ江一朗・宮崎康雄・高橋公一・西村恵祥氏ら先輩・同僚諸氏の真摯な調査や日頃の議論に負うところが大きい。心より感謝申し上げる次第である。

最後に、拙著をなすにあたって、写真類の提供を高槻市教育委員会並びに奈良文化財研究所から受けるとともに、鐘ヶ江氏には挿図作成に多大な協力をいただいた。あらためてお礼申し上げる。今後とも、摂津三島の遺跡や古墳、あるいは考古資料というものが正しく評価され、真にこの地域の歴史性が明らかになることを祈念し、擱筆する。

菊池徹夫
坂井秀弥　企画・監修「日本の遺跡」

7　今城塚と三島古墳群

■著者略歴■

森田克行（もりた・かつゆき）

1950年、大阪府生まれ
龍谷大学文学部史学科考古学専攻卒業
現在、高槻市教育委員会文化財課主幹兼埋蔵文化財調査センター所長
主要論文
『摂津高槻城』高槻市教育委員会、1984年
「複合櫛描文」『弥生文化の研究』10、雄山閣、1988年
「摂津の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾岸』大阪経済法科大学出版部、1995年
「城の石垣」『考古学による日本歴史6』雄山閣、2000年
「最古の銅鐸をめぐって」『究斑』Ⅱ、埋蔵文化財研究会、2002年

2006年2月10日発行

著　者　森田　克行
発行者　山脇　洋亮
印刷者　亜細亜印刷㈱

発行所　東京都千代田区飯田橋4-4-8　東京中央ビル内　（株）同成社
TEL 03-3239-1467　振替 00140-0-20618

© Morita Katuyuki 2006. Printed in Japan
ISBN4-88621-344-8 C3321